『早く好くなつて下さい』とか讀めない字の所もあつた。有島は子供に言ふ樣な事を書いてゐると僕は思つた。

二宮で撮した僕の寫眞も二枚、義母が持つて來た。

朝鳥や宮島からのはがきもあつた。

僕は自分の戀人を決めなければならないと思つた。

山の上の女は、一度家へ訪ねて來たと義母が言つた。

春子は十八である。久子は十九になつた。初戀の女は廿四だ。

一番若いのはM太郎だ。

僕はどれに向つて突進すべきであるか、區別と判斷に迷つた。

そして頻りに頭が混亂して來る。

第一候補者、第二候補者と、順々に選定して行つて、それをひつくり返してみたり、イロハ順に名前をならべてみたりするのだ。

頭が疲憊し切る。